

江畔独歩花を尋ぬ（杜甫）

黄四娘の家花 蹊に満ち

千朶万朶 枝を圧して 低る

留連せる 戲蝶は 時々 舞い

自在の 嬌鶯は 恰々として 啼く

黄四娘家花滿蹊 千朶萬朶厭枝低

留連戲蝶時時舞 自在嬌鶯恰恰啼

解説 杜甫が成都に住んでいたところ、浣花溪のほとりを一人

歩いていて、花をたずねて作った詩。

語釈 ※江畔Ⅱ浣花溪のほとり。※黄四娘Ⅱ草堂の近くの村のお婆さんの名。「娘」はむすめの意でなく年配の女性の呼称に用いる。※蹊Ⅱこみち。※朶Ⅱ花のついた小枝。※留連Ⅱそこに続けている。※戲蝶Ⅱたわむれる蝶。※恰々Ⅱ鳥の啼き声。

通釈 黄四娘の家では、花がこみちに咲きみちている。枝が枝をおしつけるように重なってたれている。いつまでも去らずに花に戯れている蝶は、ときどき舞い上がり、自由自在に啼く愛らしい鶯は、コウコウと啼きたてている